

森のちやれんがニュース

2021 春

Newsletter vol.23



特別企画展

『北海道の恐竜』を開催(2021年2月12日～3月14日)

北海道むかわ町穂別でみつかったカムイサウルス(むかわ竜)が生きていたところ、“海”にはクビナガリュウやアンモナイトが、“空”にはプテラノドンのなかまがいました。この展示会では、これまで北海道で研究されてきた7つの恐竜化石を初めて一挙に公開し、北海道の恐竜世界を紹介しました。

この展示会を開催するにあたり当館では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大抑止に向けた集中対策のひとつとして、オンライン予約システムを導入しました。観覧時間帯は、1回90分で、

1日4回、各回100人(18日からは120人)までの入場としました。予約の申込は、2月8日から開始し、期間中に、10,690人のお客様をお迎えすることができました。(学芸員 舟山直治)



オンライン予約システムを導入した入場風景



CONTENTS

- ② [収蔵資料紹介](#)
「鱈」1300年前の食文化を考える
- ③ [総合展示クローズアップ展示紹介](#)
クローズアップ5「岩手県から北海道へ渡った神楽」
- ④ [研究活動紹介](#)
冷凍庫の中には…死体！？
- ⑥ [はっけん広場活動報告](#)
くらしの中で色をはっけん！
- ⑦ [活動紹介](#)
北海道湿地フォーラム2020「シツススイッチ」開催
トピックス
カナダ・アルバータ州との友好40周年記念のいろいろ
アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く」この春、幕別町で開催します
- ⑧ [活動ダイアリー](#)
2020年12月～2021年2月の記録

収蔵資料紹介

こしき

「甗」1300年前の食文化を考える

鈴木 琢也

研究部歴史研究グループ 学芸主査

今回紹介する収蔵資料は、約1300年前、擦文文化期に北海道で使用されていた甗という土器です(写真1)。ここでは、この甗を紹介するとともに、当時の食文化を考えてみたいと思います。



収蔵資料の甗は、1959年(昭和34年)に札幌西高等学校郷土研究部により実施された岩見沢市(旧栗沢町)由良遺跡の発掘調査で出土したものです。この調査では擦文文化期の堅穴住居址1軒が発掘され、そこから甗のほか、長胴甕、球胴甕、坏などの土器が出土しました。その後、これらの土器は同校郷土研究部において整理・保管され、1997年(平成9年)に北海道開拓記念館(現北海道博物館)に寄贈されました。現在、この甗は北海道博物館の総合展示第1テーマに展示されています。



この甗は、小鉢のような形状で底面及び側面下部にいくつかの穴が空けられているという特徴があります(写真1)。その使用方法是、図1に示したように、カマドに据えた長胴甕の中に水を入れ、その上に甗を重ねてのせ、布を敷いて穀物を入れるというものです。このようにして、カマドで火を燃やすと、長胴甕の中の水が沸騰し蒸気が甗

生します。その蒸気が甗の穴を通して穀物に到達し、穀物が蒸しあがります。

ところで、この甗は8世紀の年代に位置づけられる土器です。つまり、約1300年前の北海道には魚や肉、山菜などを煮るだけでなく、甗で穀物(アワ・ヒエ・キビなどの雑穀か)を蒸して食べる食文化があったと想定されます。これは、擦文文化の雑穀栽培のあり方に関わる重要な問題でもあります。



さて、北海道では7世紀から8世紀にかけて土器の器種構成が大きく変化します。7世紀の土器は深鉢、注口土器、片口土器、鉢から構成されますが、8世紀の土器は長胴甕、球胴甕、甗、鉢、坏、高坏から構成され、本州東北地方の土師器の影響を受けた土器文化が北海道に浸透したと考えられます。

8世紀前半を画期として続縄文文化の土器様式が、本州東北地方土師器文化の影響を受けた擦文文化の土器様式へ移行するという変化があり、食文化や生活スタイルが大きく変化したと想定されます。この過程で、甗も北海道に伝わったと考えられます。

甗の評価には諸説があり、東北地方北部から北海道に移動した集団が持ち込んだ「土師器」とであるという説、北

海道在地の集団が東北地方北部の土器文化を受け入れ製作した「擦文土器」とであるという説などが並立した状況にあります。しかし、いずれの場合においても、8世紀前半に甗を使用して穀物を蒸すという食文化が北海道に伝わったことは確実だと考えられます。

その後、8世紀後半ないし9世紀以降の北海道では、甗が使用されなくなります。甗が木製品(穴をあけた木製板のようなもの)に置き換わったとも考えられますが、一方で、食物を蒸して食べるという本州東北地方の食文化が、長期的には北海道に根付かなかったとも考えられます。いずれにしても、約1300年前に本州の新たな食文化が北海道に伝わったことは、画期的な出来事であったといえます。



収蔵資料の甗を紹介し、そこから浮かびあがる食文化について考えてきました。甗とともに穀物を蒸すという本州東北地方の食文化が北海道に伝わったことは、続縄文文化から擦文文化への文化変容の過程を考えるうえで重要な要素となります。甗は、一つの小さな土器ですが、北海道の歴史を復元するうえで、多くの情報を与えてくれる重要な資料であるといえます。



写真1 甗 岩見沢市(旧栗沢町)由良遺跡出土 左:側面、右上:上面、右下:底面
(年代:8世紀、口径15.0cm×底径8.0cm×高さ13.8cm、収蔵番号:131,775)

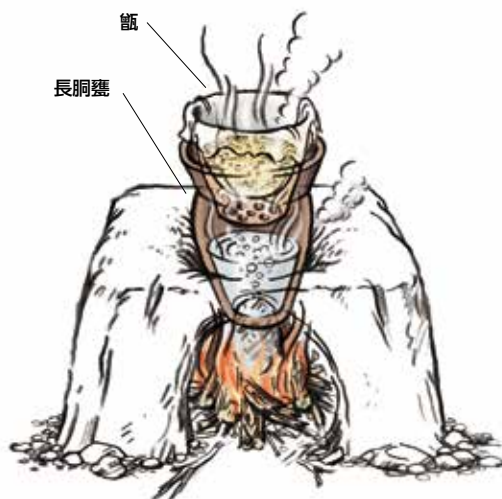


図1 甗の使用方法

総合展示クローズアップ展示紹介

クローズアップ5「岩手県から北海道へ渡った神楽」

かぐら 舟山直治

研究部生活文化研究グループ 学芸員

展示期間：2021年4月16日(金)～8月12日(木)

北海道博物館の総合展示には、通常の展示だけでは紹介しきれない話題や収蔵資料などを、定期的に入れ替えるクローズアップ展示というコーナーがあります。総合展示の5つのテーマの計7カ所に、「特別の資料を期間限定で紹介！」することを念頭におきながら展示計画を立てています。

筆者は、総合展示第3テーマ「北海道らしさの秘密」にあるクローズアップにおいて、平成28(2016)年を除き「岩手県から北海道へ渡った神楽」の展示を主に2つの理由から紹介してきました。



写真1 権現宿（厚沢部町、1993年撮影）

まず1つは、平成24(2012)年に権現様（獅子頭）など神楽道具一式を厚沢部町の個人宅から、北海道開拓記念館が収集したことに起因しています。収集前、神楽道具一式を収めた権現宿(写真1)は厚沢部町にありました。しかし、本来これらはニセコ町の狩太神社に奉納していた神楽の道具一式で、戦後になってから神楽仲間の家族がいた厚沢部町へ遷されたものです。神楽台本の「神楽聲聞記」(写真2)によると、



写真2 「神楽聲聞記」の廻り神楽



写真3 神楽講社札（表・裏）

神楽仲間はニセコ町だけではなく、現在の長万部町、共和町、余市町、小樽市、札幌市、岩見沢市、室蘭市など、広範囲の地域の神社でも神楽を奉納していたことが分かります。しかも、岩手県の神社庁が明治22(1889)年に発行した神楽講社札(写真3)を根拠にして、明治末から大正にかけて北海道で廻り神楽をしていたのです。神楽道具一式は、神楽に関わった移住者の動向だけではなく、神楽を必要としていた当時の北海道の祭祀状況を示す資料でもあるのです。

2つ目の理由は、資料そのものが貴重であることから、できるだけ多く公開したいと考えているからです。

これら道具類は、今から100年ほど前に、現在の岩手県花巻市大迫町字合石の一団が、北海道へ移り住む際に持参してきたものです。郷里から一挙して移住した影響で、合石では地域の山神社へ奉納する神楽が一時途絶えてしまい、大正末に早池峰神楽の一つである大償神楽の指導を受けて復活するに至ります。したがって、狩太神社の神

楽は、合石の古い形態を示す神楽なのです。しかも、先に触れた「神楽聲聞記」には、表1に示したように、神楽の基本となる式舞が表と裏をあわせて12舞(写真4)、女舞・番楽舞・神舞など30舞、権現舞が6幕と計48演目が記されています。これはユネスコ世界文化遺産となっている早池峰神楽にもおとらない演目数です。しかも表1の天草など朱書きの演目は、早池峰神楽の台本にはみられません。

このように神楽道具一式は、移住地のくらしの一端を物語る数少ない資料であり、移住元である岩手県の伝承を研究する上でも貴重な資料なのです。今後も生活文化研究グループの一押し資料として、年1度は展示公開していきたいと考えています。

表1 「神楽聲聞記」にみられる神楽演目

No.	演目名	「神楽聲聞記」記載 番号	演目名
1	鳥舞	一	とりまい
2	鈴	二	をきな
3	三番叟	三	さんば
4	八幡	四	八まん
5	山の神	五	やまのかみ
6	天岩戸	六	あまの岩戸
7	鳥舞	1	とりまい
8	松迎	2	マツムカイ
9	三番叟	3	サンバソ
10	八幡神	4	ハマン
11	小山の神	5	はつきく神
12	奇稲田姫	6	くしいなだひめ
13	機織り	一	はたをり
14	橋掛け	二	はしかけ
15	学環	三	をだまき
16	大江山	四	をいやま
17	五穀	五	ごぎく
18	五大龍王	六	ごだいいり
19	天女	七	てんの
20	天女	八	てんにヨ
21	年寿	九	でんじゅわかく
22	悪神	十	あくじん
23	悪魔	十一	あくま
24	天降り	十二	あまくたり
25	天草	十三	あまくさ
26	水神	十四	すいじん
27	塩汲み	十五	すくみ
28	麻折	十六	ねこきり
29	鐘巻	十七	かねまき
30	百足	十八	むかで
31	十和田	十九	とわた
32	鞍馬	廿	くらうま
33	三韓	廿一	さんか
34	木曾	廿二	きそ
35	尊揃	廿三	みこと
36	恵比須	廿四	えびす
37	白髭	廿五	すらひげ
38	屋島	廿六	やすま
39	日本武尊	廿七	やまと
40	二見ヶ浦	廿八	二見ヶ浦
41	天照五穀	廿九	だんとごぎく
42	曹我	三十	そーが
43-48	外6幕	三十一	外六まくあり
	神うた		神うた、全



写真4 「神楽聲聞記」の冒頭にある神楽

研究活動紹介

冷凍庫の中には…死体！？

鈴木 あすみ

研究部博物館研究グループ 学芸員



学芸員 鈴木あすみ

1993年生、神奈川県出身。大学時代は6年間常広で過ごす。2018年より当館学芸員。専門は野生動物、担当は博物館資料学。今年2月に標本をテーマにした講座を行いました。

冷凍庫の中身の調査をしています

冷凍庫、といってもご家庭の冷凍庫ではありません。私が調べているのは博物館で使っている冷凍庫の中身です。あまりイメージがつかないかもしれませんが、博物館では冷凍庫を使って自然史標本の保管や文化財の保存処理をしていたりします。色々な用途がありますが、当館では自然史標本の一時保管や標本の乾燥、そしてDNAサンプルの保管のために使用しています。

バックヤードの地階にある冷凍庫はあまり大きなものではありませんが、蓋を開けると色々な「お宝」を見つげることができます。「お宝」の例を挙げると、野幌森林公園で採集された動物のフン、乾燥中の昆虫標本、植物の

タネ、大きな魚、そして哺乳類や鳥類の遺体などです。これらの「お宝」に物理的・化学的に手を加えることで、常温で長期保存できる状態にします。これが生物標本と呼ばれるものです。つまり、これらの凍った「お宝」はよく見かけられるような標本の材料ということになります。

最近、私はその「お宝」の中でも鳥類について、近隣の博物館に協力していただき調査をはじめました。ここでは、その調査内容や鳥類標本の収集活動などを紹介したいと思います。

遺体を集めてどうするのか？

当館に保管されている鳥類の遺体は全部で43個体あります。これらはすべて野生由来のもので、博物館の近くで事故死しているものが多くを占めています。これらの遺体を

どうやって集めているかというと、まず窓ガラスにぶつかったり交通事故に遭ったりして死んでしまった鳥を拾ってきます。そして採集した場所と日付をメモに書いたら遺体と一緒にビニール袋に入れて博物館の冷凍庫に入れます。集められた鳥類の遺体は、将来の展示や研究に活用するために剥製標本や骨格標本に加工します。標本作製は専門の業者をお願いしたり、簡単なものであれば学芸員が自前で作ることもあります。

こうした方法で鳥類の標本を収集していますが、死んでいるとはいえ動物を扱うので色々と注意しないといけないこともあります。野生動物は人獣共通感染症のもととなる病原菌などを保有しているおそれがあるので、取り扱うときには衛生面に十分配慮する必要があります。例えば、遺体を拾うときに素手で直接触らないようにすることなどは基本で、標本作製時には手袋やマスク、白衣の着用をするようにしています。また、作業後に動物園や牧場などの動物飼育施設には近づかない配慮も必要です。

どんな鳥がどれだけあるのだろう？

このように鳥類の遺体を集めている博物館は当館以外にもあります。しかし、この採集方法では、どうしても集まる種に偏りが出てきてしまったり、状態も良し悪しを選ぶことが難しいた

め、鳥類標本のコレクションを揃えていくのは大変なことです。各館独自の活動に加えて、近くの博物館同士で集めた遺体の情報をシェアするこ



図1 博物館の冷凍庫



図2 鳥の遺体たち

とで、標本交換や譲渡をしやすくていいのではないかと考え、札幌市近郊の博物館などの施設の協力のもとで冷凍庫の鳥類遺体調査をしました。

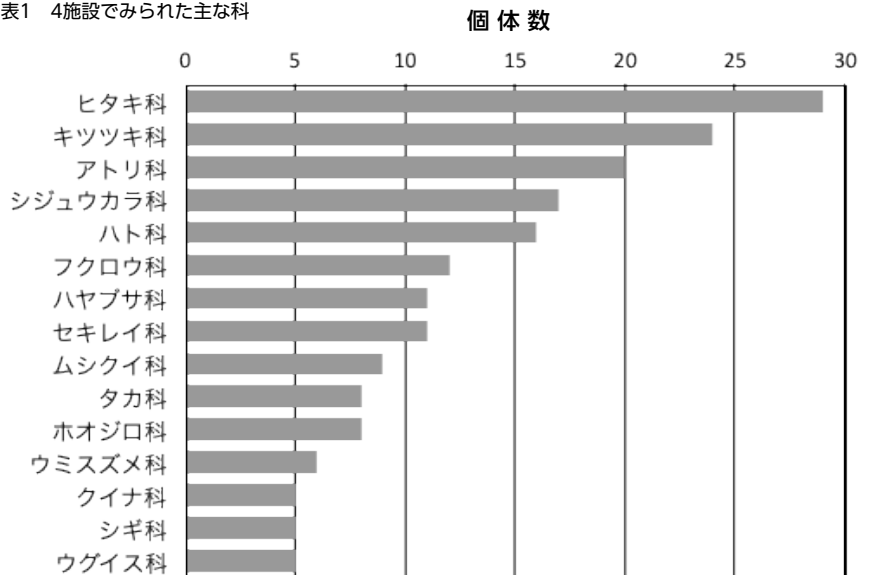
調査では、とにかく冷凍庫の中に保管されている遺体を記録していきます。採集日や採集場所がラベルに書かれているので、それをリストに転記していきます。ときには一袋の中に何個体も入っていたりすることもあり、一点一点確認することで確実なリストを作っていました。施設によっては管理用のデータを使いました。こうして得られた施設ごとのリストをまとめて、ひとまずひとつのデータにしました。現在、当館含め4館分、鳥の数でいうと91種233個体分のデータが集まっています。

どんな鳥が保管されているのか少し見てみましょう。合計で5個体以上みられた科(目の下、種の上の分類階級)を多い順に並べてみました(表1)。上位に入っているヒタキ科、キツツキ科、アトリ科、シジュウカラ科、ハト科は身近な小鳥として知られるような鳥が多く属しています。主に洋上で生活するウミスズメ科や小さなツルの仲間のクイナ科などの比較的珍しい科も保管されていることがわかりました。

なぜ鳥類の遺体を調べるのか

環境教育や自然史研究の場面では、博物館等の所蔵する自然史標本が重要な役割を果たすことは少なくありません。将来に残すべき自然史の記録ではあるのですが、鳥類や哺乳類は法律で捕獲が制限されているため、前述の方法に入手手段が限られています。停電のリスクやスペースの問題を抱える冷凍庫での保管は永久的なものではなく、なるべく早くに標本化する必要があります。しかし、処理が遅れて長期間冷凍保管されてしまっているものも今回の調査では見つ

表1 4施設でみられた主な科



けることができました。処理が遅れてしまう理由として、標本化には労力やお金がかかることが挙げられます。そうすると、たくさんある在庫のなかから優先順位をつける必要が出てきてしまい、選に漏れた個体が溜まっていくという仕組みです。

冷凍庫の鳥類遺体の保有状況を館外に公開している例はほとんどありませんが、仮に標本化の優先度が異なる利用者がこの情報にアクセス可能になると、活用チャネルの増加が見込まれます。例えば、当館では所蔵する鳥類標本の数は300点ほどあります。タンチョウや大型のワシタカ類、家禽などは複数の標本を収蔵していますが、ハシブトガラやスズメなどに代表されるような普通種の標本は残念ながら十分に揃っていないので、そうした種の標本化優先順位は高くなります。

今回の調査は冷凍保管されている鳥類遺体の可視化が目的でした。将来的

にはデータベースの公開を目指していて、それによって活用チャネルの増加を期待しています。

「博物館資料学」担当として

北海道博物館のなかには、資料や地域にフォーカスした研究を行っている学芸員がたくさん在籍しています。私の仕事はそうした学芸員の仕事が円滑に進むようにするための基盤整備ともいえます。資料の収集から博物館での登録まで、そして資料情報の整理や活用をするときに、役立ててもらえるような取り組みや研究を進めています。

今回は館内外の自然史系学芸員が鳥類標本を収集しやすく、活用しやすくするためにはどうしたらいいか、ということテーマに研究をしました。抱えている課題を少しでも減らして、学芸員と利用者の方々が資料を使うときの利便性を高めていきたいです。

※本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成を受けて実施しました。研究課題名は「博物館と地域の連携による鳥類標本データベース構築—未利用個体の活用に向けたモデルづくり—」です。



図3 袋に入ったアオバト

はっけん広場活動報告

くらしの中で色をはっけん！

昨年の夏、自宅の窓をトントンと叩く音がするのでそっと覗いてみると、ノックの主はやはりキウイフルーツの蔓でした。20年前、両親が庭に植えたキウイの蔓と葉は夏に盛大に生い茂り、毎年悩みの種なのです。

ちょうどその頃、はっけん広場で使う羊毛の染色を始めていた私はふと、昭和初期に北海道庁種羊場の初代場長を務めた山田喜平氏が、天然染料で染めた羊毛を使って、本道ホームスパン



窓をノックするキウイの蔓

(手紡ぎ・手織りの織物)の特色を出したい、と著していたことを思い出しました(北海道庁種羊場 1936「緬羊彙報」第4号)。

ひょっとするとキウイの葉・蔓も染料になるのでは…と思い立ち試してみると、媒染(染料を繊維に定着させる工程)によって、アイボリー・モスグリーン・グレーに染まっていきます。いずれも渋くて優しい色です。すっかり嬉しくなり、その後も大好きなアボ



キウイの葉・蔓から煮出した液で羊毛を染める

浅井 雅世

学芸部道民サービスグループ 解説員

カドの皮と種、毎朝飲むコーヒーの出し殻などを染料にして、くらしの中から素敵な色を発見する毎日が続いています。

新型コロナウイルス感染予防のため、はっけん広場は現在休室中ですが、天然染料で染めた優しい色の羊毛と一緒にお客様をお迎えし、ものづくりを楽しめる日が一日も早く訪れることを、心から祈っています。



キウイ染めの羊毛で作ったブチマフラー

活動紹介

北海道湿地フォーラム2020「シッチスイッチ」開催

表 溪 太

研究部自然研究グループ 学芸員

北海道は湿原の宝庫で、日本に現存する湿原の9割近くが分布しています。湿原というと日本最大の釧路湿原が有名ですが、実はかつて札幌に近い石狩川流域にはその数倍の規模の湿原が広がっていました。石狩川流域の湿原は開発によってそのほとんどが農地や宅

地に変わり、そのほかの湿原も減り続けています。

そうした湿地(湿原だけでなく湖沼・河川・干潟なども含む)の今と未来を考える、北海道湿地フォーラム2020「シッチスイッチ」を、北海道湿地コンソーシアム、(公財)北海道環境財団等と共同で企画しました。新型コロナウイルスの状況が見通せない中ではありましたが、できる限りの感染対策をとった上で、昨年10月24、25日に札幌市民交流プラザをメイン会場に無事

開催することができました。フォーラムは、札幌近郊に残された湿原を見学するエクスカッション、湿地に関わる研究の第一人者の先生方によるサイエンスセッション、歌や寸劇も交えて湿地の魅力を語るエンターテイメントセッションなど盛りだくさん内容でした。

北海道博物館では今年も湿地をテーマとした楽しい企画を計画しています。ご期待ください。



「シッチスイッチ」ポスター



サイエンスセッションは、生中継した動画のアーカイブを視聴できます。興味のある方はぜひご覧ください。

サイエンスセッション
QRコード

トピックス

カナダ・アルバータ州との友好40周年記念のいろいろ

山田 伸一

学芸部社会貢献グループ 学芸主査

2020年は、北海道とカナダのアルバータ州が友好提携をして40年の記念の年。当館も、道の国際課が企画した記念事業に参加しました。

まずは、当館がロイヤル・アルバータ博物館と重ねてきた研究交流の紹介をYouTubeに掲載。日英の字幕をつけた、約3分のスライドショーです。

そして、アルバータ州の自然や文化、両地域の交流の歩みを紹介するパネル展。同州の自治体と友好提携をし

ている道内5町村を巡ってきたパネルを、2021年1月23日から2月7日まで当館2階で展示しました。会場の総合展示室出口と特別展示室入口の間の広い通路は、ロイヤル・アルバータ博物館を紹介する展示ケースがある場所です。

コロナ禍で人の行き来が途絶えがちななか、太平洋の向こうのアルバータ州との大切な関係に思いを馳せるささ

やかな機会を提供できたと思います。

ロイヤル・アルバータ博物館も、臨時休館をしたり、体験企画を休止したりのこの一年。でも、工夫を凝らした発信が、インターネットで届きます。

特におすすめは「RAM BLOG」。鳥類学者のJocelyn Hudonさんは北海道での調査成果にも触れて、鳥の色と食べ物について語ります。

Nancy Nickolsonさんが様々な分野の学芸員と組んで送り出す体験プログラムにも注目。楽器のバンジョー作り、靴下で作るゾウの人形、等々。最近の発信、動物の糞をかたどったチョコレート菓子の作り方は、衝撃的です。

ロイヤル・アルバータ博物館のウェブサイト
(<https://royalalbertamuseum.ca>)



パネル展会場のようす



アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く」この春、幕別町で開催します

小川 正人

アイヌ民族文化研究センター長

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

2021年度は、まず十勝の幕別町にて、アイヌ語地名研究の第一人者・山田秀三の地名調査資料を紹介する「アイヌ語地名を歩く」を開催します。



忠類、当縁川付近の地名記録より（1973年）



地名調査の記録が書き込まれた、札内～幕別市街地付近の5万分の1地形図（1970年頃）

展示では、山田秀三による地名調査の記録の中から、幕別町とその周辺に関する調査ノート、地形図、写真などを紹介していきます。

会期中には、関連する講座やイベントを実施する予定です。詳しくは当館ウェブサイトなどをご覧ください。

【会場と会期】

4月29日（木・祝日）～5月17日（月）

幕別町忠類ナウマン象記念館

（幕別町忠類白銀町383-1）

5月21日（金）～6月20日（日）

幕別町百年記念ホール

（幕別町千住180-1）

活動ダイアリー

2020年12月～2021年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

12月5日(土)

■はじめての古文書講座④を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

12月6日(日)

■子どもワークショップ「貝の化石で標本をつくろう!」を開催。担当：圓谷昂史、畠誠氏(北広島市エコミュージアムセンター知新の駅)

12月13日(日)

■ミュージアムカレッジ「アイヌの物語を聞いてみようーカッパの神様登場ー」を開催。担当：大谷洋一。

12月19日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①近世文書を読む⑤岩野家文書
～2月18日(木)まで開催。②北海道のお酒とジュースのラベルあれこれ
～2月18日(木)まで開催。③キーステン・レフシン氏寄贈のアイヌ語資料
～4月15日(木)まで開催。④渋沢栄一・渋沢敬三とアイヌ史・アイヌ文化
～4月15日(木)まで開催。

⑤吉田初三郎と北海道

～4月15日(木)まで開催。

⑥たくぎん(北海道拓殖銀行)
～4月15日(木)まで開催。⑦リングはなぜ赤い? 木の実・草の実の不思議な世界
～4月15日(木)まで開催。

12月20日(日)

■ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願! 日本の画材で絵馬づくり」を開催。担当：田中祐未・三浦泰之・水島未記。

1月10日(日)

■ミュージアムカレッジ「北海道の正月料理」を開催。担当：尾曲香織。

1月16日(土)

■はじめての古文書講座⑤を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

1月17日(日)

■子どもワークショップ「博物館のなかで宝さがし」を開催。担当：舟山直治・池田貴夫。



1月23日(土)

■ちゃれんがワークショップ「野鳥の標本 見どころと作り方」を開催。担当：鈴木あすみ・表深太。

■北海道・アルバータ州姉妹提携40周年記念パネル展。～2月7日(日)まで開催。担当：社会貢献グループ。

1月27日(水)

■館内定例報告会を開催。発表者：池田貴夫。

1月30日(土)

■はじめての古文書講座⑥を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

1月31日(日)

■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀・博物館研究グループスタッフ。

2月10日(水)

■特別企画展「北海道の恐竜」内覧会。



2月12日(金)

■特別企画展「北海道の恐竜」開幕。
(～3月14日(日))

2月13日(土)

■はじめての古文書講座⑦を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

2月14日(日)

■子どもワークショップ「はじめての草木染め」を開催。担当：会田理人。

2月19日(金)

■総合展示室クローズアップ展示①・②を展示入替。

①近世文書を読む⑥近藤家文書
～4月15日(木)まで開催。②新しく仲間入りした歴史資料たち
～4月15日(木)まで開催。

2月21日(日)

■ミュージアムカレッジ「近世における「アットゥシ」の地域差と流通」を開催。担当：大坂拓。

2月27日(土)

■自然観察会「動物の足跡を解読しよう」を開催。担当：表深太・水島未記・堀繁久・鈴木あすみ・自然ふれあい交流館スタッフ。

■はじめての古文書講座⑧を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

来館者数

○2020年12月～2021年2月

総合展示室 5,062人 特別展示室 5,523人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2021年2月)

総合展示室 555,082人 特別展示室 393,563人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第23号

発行日：2021年3月25日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2021